

# 袈裟と盛遠

芥川龍之介

青空文庫



## 上

夜、盛遠もりとおが築土つじの外で、月魄つきしろを眺めながら、落葉おちばを踏んで物思いに耽たっている。

## その独白

「もう月の出だな。いつもは月が出るのを待ちかねる己おれも、今日ばかりは明るくなるのがそれら恐しい。今までの己おれが一夜うちの中に失われて、明日あすからは人殺あになり果てるのだと思うと、こうしていても、体が震えて来る。この両の手が血で赤くなった時を想像して見るが好いい。その時の己おれは、己自身にとつて、どのくらい呪のろわしいものに見えるだろう。それも己の憎む相手を殺すのだしたら、己は何もこんなにかましい思いをしなくてもすんだのだが、己は今夜、己の憎んでいない男を殺さなければならぬ。

己はあの男を以前から見知やっている。渡左衛門尉わたるさゑもんと云う名は、今度の事に就いて知つたのだが、男にしては柔やしすぎる、色の白い顔を見覚えたのは、いつの事だかわから

ない。それが袈裟けさの夫だと云う事を知った時、己けが一時嫉妬を感じたのは事実だった。しかしその嫉妬も今では己の心の上に何一つ痕跡こんせきを残さないうで、綺麗に消え失せてしまっている。だから渡わたるは己にとつて、恋の仇かたきとは云いながら、憎くもなければ、恨めしくもない。いや、むしろ、己はあの男に同情していると云つても、よいくらいだ。衣ころも川がわの口から渡が袈裟を得るために、どれだけ心を労したかを聞いた時、己は現にあの男を可愛かわゆく思つた事さえある。渡は袈裟を妻にしたい一心で、わざわざ歌の稽古までしたと云う事ではないか。己はあの生真面目きまじめな侍の作つた恋歌れんかを想像すると、知らず識らず微笑が唇に浮んで来る。しかしそれは何も、渡を嘲あざける微笑ではない。己はそうまでして、女に媚こびるあの男をいじらしく思うのだ。あるいは己の愛している女に、それほどまでに媚こびようとするあの男の熱情が、愛人たる己にある種の満足を与えてくれるからかも知れない。

しかしそう云えるほど、己は袈裟を愛しているだろうか。己と袈裟との間の恋愛は、今と昔との二つの時期に別れている。己は袈裟がまだ渡に縁ゆかりづかない以前に、既に袈裟を愛していた。あるいは愛していると思つていた。が、これも今になつて考えると、その時の己の心もちには不純なものも少くはない。己は袈裟に何を求めたのか、童貞だった頃の己は、明らかに袈裟の体を求めていた。もし多少の誇張を許すなら、己の袈裟に対する愛な

るものも、実はこの欲望を美しくした、感傷的な心もちに過ぎなかった。それが証拠には、袈裟との交渉が絶えたその後の三年間、なるほど成程己はあの女の事を忘れずにいたにちがいないが、もしその以前に己がああ女の体を知っていたなら、それでもやはり忘れずに思いつづけていたであろうか。己は恥しながら、然りと答える勇氣はない。己が袈裟に対するその後の愛着の中には、あの女の体を知らずにいる未練みれんがかなり混っている。そうして、その悶々もんもんの情を抱きながら、己はどうとう己の恐れていた、しかも己の待っていた、この今いまの関係にはいつてしまった。では今は？ 己は改めて己自身に問いかけよう。己は果して袈裟を愛しているだろうか。

が、その答をする前に、己はまだ一通り、嫌いやでもこう云ういきさつを思い出す必要がある。——渡辺の橋の供養の時、三年ぶりで偶然袈裟にめぐり遇った己は、それからおよそ半年ばかりの間、あの女と忍び合う機会を作るために、あらゆる手段を試みた。そうしてそれに成功した。いや、成功したばかりではない、その時、己おれは、己が夢みていた通り、袈裟けさの体を知る事が出来た。が、当時の己を支配していたものは、必しも前に云った、まだあの女の体を知らないと云う未練ばかりだった訳ではない。己は衣ころも川がわの家で、袈裟と一つ部屋の畳へ坐った時、既にこの未練がいつか薄くなっているのに気がついた。それ

は己がもう童貞でなかったと云う事も、その場になって、己の欲望を弱める役に立ったのである。しかしそれよりも、主な原因は、あの女の容色が、衰えていると云う事だった。實際今の袈裟は、もう三年前の袈裟ではない。皮膚は一体に光沢を失って、目のまわりにはうす黒く暈のようなものが輪どつている。頬のまわりや顎の下にも、以前の豊かな肉附きが、嘘のようになくなってしまった。僅に変わらないものと云っては、あの張りのある、黒く瞳勝な、水々しい目ばかりであろうか。——この変化は己の欲望にとって、確かに恐しい打撃だった。己は三年ぶりで始めてあの女と向い合った時、思わず視線をそらさずにはいられなかったほど、強い衝動を感じたのを未にはつきり覚えている。……

では、比較的そう云う未練を感じていない己が、どうしてあの女に関係したのであろう。己は第一に、妙な征服心に動かされた。袈裟は己と向い合っていると、あの女が夫の渡に對して持っている愛情を、わざと誇張して話して聞かせる。しかも己にはそれが、どうしてもある空虚な感じしか起させない。「この女は自分の夫に對して虚栄心を持っている。」——己はこう考えた。「あるいはこれも、己の憐憫を買いたくないと云う反抗心の現れかも知れない。」——己はまたこうも考えた。そうしてそれと共に、この嘘を暴露させてやりたい気が、刻々に強く己へ働きかけた。ただ、何故それを嘘だと思ったかと云われ

ば、それを嘘だと思つた所に、己の己惚れうぬぼがあると云われれば、己には元より抗弁するだけの理由はない。それにも関らず、己はその嘘だと云う事を信じていた。今でも猶信なほじている。

が、この征服心もまた、当時の己を支配していたすべてではない。そのほかに——己はこう云つただけでも、己の顔が赤くなるような気がする。己はそのほかに、純粹な情欲に支配されていた。それはあの女の体を知らないと言ふ未練ではない。もつと下等な、相手があつた女である必要のない、欲望のための欲望だ。恐らくは傀儡くわいの女を買ふ男でも、あの時の己ほどは卑しくなかつた事であろう。

とにかく己はそう云ういろいろな動機で、とうとう袈裟と関係した。と云うよりも袈裟を辱はずかしめた。そうして今、己の最初に出した疑問へ立ち戻ると、——いや、己が袈裟を愛しているかどうかなどと云う事は、いくら己自身に対してでも、今更改めて問う必要はない。己はむしろ、時にはあの女に憎しみさえも感じている。殊に万事が完おわつてから、泣き伏しているあの女を、無理に抱き起した時などは、袈裟は破廉恥はれんちの己よりも、より破廉恥な女に見えた。乱れた髪のかかりと云い、汗ばんだ顔の化粧けしと云い、一つとしてあの女の心と体との醜さを示していないものはない。もしそれまでの己があつた女を愛していたとした

ら、その愛はあの日を最後として、永久に消えてしまったのだ。あるいは、もしそれまでの己おれがあの女を愛していなかったとしたら、あの日から己の心には新しい憎にくみが生じたと云つてもまた差さ支しえつかない。そうして、ああ、今夜己はその己が愛していかない女のために、己が憎んでいない男を殺そうと云うのではないか！

それも完まったく、誰の罪でもない。己がこの己の口で、公然と云い出した事なのだ。「渡わたを殺そうではないか。」——己があの女の耳に口をつけて、こう囁ささいた時の事を考えると、我ながら気が違つていたのかとさえ疑われる。しかし己は、そう囁ささいた。囁ささくまいと思いながら、齒を食いしばつてまでも囁ささいた。己にはそれが何故なぜ囁ささきたかつたのか、今になつて振りかえつて見ると、どうしてもよくわからない。が、もし強つよいて考えれば、己はあの女を蔑さげめば蔑さげむほど、憎にくく思いえば思うほど、益々何かあの女に凌り辱やを加くえたくてたまらなくなつた。それには渡わた左衛門尉さゑもんを、——袈裟けさがその愛を銜てつていた夫を殺そうと云うくらい、そうしてそれをあの女に否いや応おうなく承諾させるくらい、目的に協かつた事はない。そこで己は、まるで悪夢に襲おされた人間のように、したくもない人殺しを、無理にあの女に勧めたのであろう。それでも己が渡わたを殺そうと云つた、動機が十分でなかつたなら、後あとは人間の知らない力が、(天魔波旬てんまはじゆんとでも云うが好い)。己の意志を誘さそつて、邪

道へ陥れたとでも解釈するよりほかはない。とにかく、己は執念深く、何度も同じ事を繰返して、袈裟の耳に囁いた。

すると袈裟はしばらくして、急に顔を上げたと思うと、素直に己の目ろみに承知すると云う返事をした。が、己にはその返事の容易だったのが、意外だったばかりではない。その袈裟の顔を見ると、今までに一度も見えなかつた不思議な輝きが目に宿っている。姦婦——そう云う気が己はすぐにした。と同時に、失望に似た心もちが、急に己の目ろみの恐しさを、己の眼の前へ展げて見せた。その間も、あの女の淫りがましい、凋れた容色の厭らしさが、絶えず己を虐んでいた事は、元よりわざわざ云う必要もない。もし出来たなら、その時に、己は己の約束をその場で破つてしまいたかつた。そうして、あの不貞な女を、辱しめと云う辱しめのどん底まで、つき落してしまいたかつた。そうすれば己の良心は、たとえあの女を弄んだにしても、まだそう云う義憤の後に、避難する事が出来たかも知れない。が、己にはどうしても、そうする余裕が作れなかつた。まるで己の心もちを見透しでもしたように、急に表情を変えたあの女が、じつと己の目を見つめた時、——己は正直に白状する。己が日と時刻とをきめて、渡を殺す約束を結ぶような羽目に陥つたのは、完く万一己が承知しない場合に、袈裟が己に加えようとする復讐の恐怖からだつた。い

や、今でも猶なほこの恐怖は、執念深く己の心を捕えている。臆病だと晒わらう奴は、いくらでも晒わらうが好いい。それはあの時の袈裟を知らないものとする事だ。「己おれが渡わたるを殺さないとするれば、よし袈裟けさ自身は手を下さないにしても、必ず、己はこの女に殺されるだろう。そのくらいなら己の方で渡を殺してしまつてやる。」——涙がなくて泣いているあの女の目を見た時に、己は絶望的にこう思った。しかもこの己の恐怖は、己が誓せいごん言をした後あとで、袈裟が蒼白い顔に片かたえくぼ 壓おさをよせながら、目を伏せて笑つたのを見た時に、裏書きをされたではないか。

ああ、己はその呪のろわしい約束のために、汚けがれた上にも汚れた心の上へ、今また人殺しの罪を加えるのだ。もし今夜に差迫つて、この約束を破つたなら——これも、やはり己には堪えられない。一つには誓せいごん言の手前もある。そうしてまた一つには、——己は復讐を恐れると云つた。それも決して嘘ではない。しかしその上にまだ何かある。それは何だ？ この己を、この臆病な己を追いやって罪もない男を殺させる、その大きな力は何だ？ 己にはわからない。わからないが、事によると——いやそんな事はない。己はあの女を蔑さげすんでいる。恐れている。憎んでいる。しかしそれでも猶なほ、それでも猶なほ、己はあの女を愛しているせいかも知れない。」

盛遠もりとおは徘徊わいはいを続けながら、再び、口を開かない。月明つきあかり。どこかで今様いまようを謡うたう声がする。

げに人間の心こそ、無明むみょうの闇ことなも異ことらね、  
ただ煩惱ぼんのうの火と燃えて、消ゆるばかりぞ命なる。

下

夜、袈裟けさが帳台ちやうだいの外で、燈台の光に背そむきながら、袖を嚙かんで物思いに耽たつている。

その独白

「あの人は来るのかしら、来ないのかしら。よもや来ない事はあるまいと思うけれど、もうかれこれ月が傾くのに、足音もしない所を見ると、急に気でも変ったではあるまいか。もしひよつとして来なかつたら——ああ、私はまるで傀儡くわいの女のようにこの恥しい顔を出げて、また日の目を見なければならぬ。そんなあつかましい、邪よこしまな事がどうして私に出

来るだろう。その時の私こそ、あの路ばたに捨ててある死体と少しも変りはない。辱められ、踏みにじられ、揚句あげくの果にその身の恥をのめのめと明るみに曝さらされて、それでもやはり唾おしのように黙つていなければならぬのだから。私は万一そうなつたら、たとい死んでも死にきれない。いやいや、あの人は必ず、来る。私はこの間別れ際に、あの人の目を覗のぞきこんだ時から、そう思わずにはいられなかった。あの人は私を怖こわがっている。私を憎み、私を蔑さげすみながら、それでも猶なほ私を怖おそがっている。成程私が私自身を頼みにするのだつたら、あの人が必ず、来るとは云われまいだろう。が、私はあの人を頼みたのしみにしている。あの人の利己心を頼みたのしみにしている。いや、利己心が起させる卑しい恐怖を頼みたのしみにしている。だから私はこう云われるのだ。あの人はきつと忍んで来るのに違いない。……

しかし私自身を頼みにする事の出来なくなつた私は、何と云うみじめな人間だろう。三年前の私は、私自身を、この私の美しさを、何よりもまた頼みたのしみにしていた。三年前と云うよりも、あるいはあの日までと云つた方が、もつとほんとうに近いかも知れない。あの日、伯母様の家の一間で、あの人と会つた時に、私はたった一目見たばかりで、あの人の心に映うつっている私の醜みにくさを知つてしまった。あの人は何事もないような顔をして、いろいろ私を唆そそのかすような、やさしい語ことばをかけてくれる。が、一度自分の醜みにくさを知つた女の心が、ど

うしてそんな語ことばに慰められよう。私はただ、口惜くやくしかった。恐おそしかった。悲かなしかった。子供の時に乳母うばに抱かれて、月蝕げつしよくを見た気味の悪さも、あの時の心もちに比べれば、どのくらいみだかわからない。私の持つていたさまざまな夢は、一度にどこかへ消えてしまふ。後にはただ、雨のふる明け方のような寂しさが、じっと私の身のまわりを取り囲んでいるばかり——私はその寂しさに震ふるえながら、死んだも同様なこの体を、とうとうあの人に任せてしまった。愛してもいないあの人に、私を憎にくんでいる、私を蔑さげすんでいる、色好みなあの人に。——私は私の醜みにくさを見せつけられた、その寂しさに堪たえなかつたのである。うか。そうしてあの人の胸に顔を当てる、熱に浮かされたような一瞬間にすべてを欺あざわかうとしたのであろうか。さもなければまた、あの人同様、私もただ汚よごらわしい心もちに動かされていたのであろうか。そう思っただけでも、私は恥はしい。恥はしい。恥はしい。殊とにあの人の腕を離れて、また自由な体に帰った時、どんなに私は私自身を浅間あさましく思つた事であらう。

私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思つても、止とめ度どなく涙あふが溢あふれて来た。けれども、それは何も、操みさおを破やぶられたと云う事だけが悲かなしかった訳ではない。操みさおを破やぶられながら、その上にも卑いやしめられていると云う事が、丁度癩うついを病やんだ犬のように、憎にくまれなが

らも虐さいなまれていると云う事が、何よりも私には苦しかった。そうしてそれから私は一体何をしていたのであろう。今になって考えると、それも遠い昔の記憶のように朧おぼろげにしかわからない。ただ、すすり上げて泣いている間に、あの人の口髭くちひげが私の耳にさわったと思うと、熱い息と一しよに低い声で、「渡わたるを殺そうではないか。」と云う語ことばが、囁ささやかれたのを覚えていいる。私はそれを聞くと同時に、未いまだに自分にもわからない、不思議に生いき々いきした心もちになった。生々した？ もし月の光が明いと云うのなら、それも生々した心もちであらう。が、それはどこまでも月の光の明さとは違う、生々した心もちだった。しかし私は、やはりこの恐こしい語ことばのために、慰められたのではなかったらうか。ああ、私は、女と云うものは、自分の夫を殺してまでも、猶人に愛されるのが嬉しく感ぜられるものなのだろうか。

私はその月夜の明さに似た、寂しい、生々した心もちで、またしばらく泣きつづけた。そうして？ そうして？ いつ、私は、あの人の手引をして夫を討たせると云う約束を、結んでなどしまつたのであろう。しかしその約束を結ぶと一しよに、私は始めて夫の事を思出した。私は正直に始めてと云おう。それまでの私の心は、ただ、私の事を、辱はずかしめられた私の事を、一いち瞬しゆんにじつと思つていた。それがこの時、夫の事を、あの内気うちきな夫の事を、

——いや、夫の事ではない。私に何か云う時の、微笑した夫の顔を、ありあり眼の前に思い出した。私のもくろみだが、ふと胸に浮んだのも、恐らくその顔を思い出した刹那せつなの事であつたろう。何故と云えば、その時に私はもう死ぬ覚悟をきめていた。そうしてまたきめる事の出来たのが嬉しかった。しかし泣き止んだ私が顔を上げて、あの人の方を眺めた時、そうしてそこに前の通り、あの人の心に映っている私の醜さを見つけた時、私は私の嬉しさが一度に消えてしまったような心もちがする。それは——私はまた、乳母と見た月げつしよ蝕くの暗さを思い出してしまふ。それはこの嬉しさの底に隠れている、さまざまの物の怪ものけを一時ひとときに放つたようなものだつた。私が夫の身代りになると云う事は、果して夫を愛しているからだろうか。いや、いや、私はそう云う都合つごうの好い口実くつじの後で、あの人に体を任かした私の罪の償つぐのいをしようとする気を持つていた。自害をする勇氣のない私は。少しでも世間の眼に私自身を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。けれどもそれはまだ大目にも見られよう。私はもつと卑いやしかった。もつと、もつと醜みにくかった。夫の身代りに立つと云う名なの下で、私はあの人の憎しみに、あの人の蔑さげすみに、そうしてあの人が私を弄もてあそんだ、その邪よこしまな情欲かたきに、仇を取ろうとしていたではないか。それが証拠には、あの人の顔を見ると、あの月の光のような、不思議な生いきいき々々しさも消えてしまつて、ただ、悲しい心もちば

かりが、たちまち私の心を凍らせてしまう。私は夫のために死ぬのではない。私は私のために死のうとする。私の心を傷けられた口惜しさと、私の体を汚された恨めしさと、その二つのために死のうとする。ああ、私は生き甲斐がなかったばかりではない。死に甲斐さえもなかったのだ。

しかしその死甲斐のない死に方でさえ、生きてゐるよりは、どのくらい望ましいかわからない。私は悲しいのを無理にほほ笑みながら、繰返してあの人と夫を殺す約束をした。

感じの早いあの方は、そう云う私の語から、もし万一約束を守らなかった暁には、どんなことを私がしでかすか、大方推察のついた事であろう。して見れば、誓言までしたあ

の人が、忍んで来ないと云う筈はない。——あれは風の音であろうか——あの日以来の苦しい思が、今夜でやつと尽きるかと思えば、流石に気の緩むような心もちもする。明日の

日は、必ず、首のない私の死骸の上に、うすら寒い光を落すだろう。それを見たら、夫は——いや、夫の事は思うまい、夫は私を愛している。けれど、私にはその愛を、どうしようも云う力もない。昔から私にはたった一人の男しか愛せなかつた。そうしてその一人の男が、今夜私を殺しに来るのだ。この燈台の光でさえそう云う私には晴れがましい。しかもその恋人に、虐まれ果てている私には。」

袈裟<sup>けさ</sup>は、燈台の火を吹き消してしまふ。ほどなく、暗の中でかすかに葦<sup>しとみ</sup>を開く音。それと共にうすい月の光がさす。

(大正七年三月)



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月23日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 袈裟と盛遠

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>